

曾孟樸の青春

樽本照雄

はじめに

曾孟樸の伝記といえ、今までのところ息子虚白の筆になる「曾孟樸先生年譜」がほとんど唯一のものとしてあった。この年譜は、虚白が父孟樸自身から聞いたこと、あるいは遺著、また虚白の記憶、親友の証言などをもとに編集したもので、雑誌『宇宙風』に3期にわたって連載(第2～4期)された。

林語堂を編集者とする『宇宙風』は創刊号を曾孟樸記念特集にするつもりで、その編集を虚白にゆだねたが、原稿の整理が間に合わなかったらしく、創刊号には「病夫日記」と題して日記の一節を抄録したにとどまった。その第2期には「紀念曾孟樸先生特刊」と称し、遺影と原稿の写真をかかげ、蔡元培、胡適等の追悼文と「病夫日記」の一部、およびこの「年譜」が掲載されている。

身近に接していた者にしか書けないようなエピソードを交えながら、詳細に孟樸の生涯をたどったこの年譜は、台湾世界書局版『孽海花』(1957. 5)の附録、魏紹昌編『孽海花資料』(北京中華書局1962. 4未見)や『伝記文学』第8巻第4・6期(1966. 4. 1・6. 1)に再録されているところからもその資料的価値の高さがうかがわれよう。またこのことは、その間、虚白の「年譜」を凌駕する伝記が書かれなかったことをも同時に意味する。

ただ「年譜」に「未定稿」と記してあるように、虚白自身必ずしもその出来ばえに満足していたわけではなく、改めるべき点、補充、削除すべき点を指摘

1) 東亜病夫「病夫日記」『宇宙風』第1期 1935. 9. 16の虚白附識による。

してほしいとその序に書いている。²⁾

事実、「年譜」が公表された直後、徐一士は「読『曾孟樸先生年譜』³⁾」を書き、いくつかの事実の誤まりを指摘した。

だが、より重要な誤記がある。烏居久晴「《華海花資料》紹介」で知ったことだが、『華海花資料』では「年譜」の西暦が1年ずつずれているという指摘がなされているらしい。「年譜」では生年を1871年、卒年を1934年としているが、正しくは1872—1935年ということになる。生年の1872年というのはおくとしても、1935年6月23日死亡というのは確かなことで、なぜ誤記されたのか理解に苦しむ。

では、1年ずつずれているのを簡単に訂正できるかという点、これが容易ではない。ひとつひとつの事実を確認することが必要となり、出来る部分よりできないことの方が多く、非常な困難が予想される。

ここに李培徳著陳孟堅訳『曾孟樸的文学旅程』という本がある。本書に収められた文章は、『伝記文学』に長期連載された⁴⁾ものであり、単行本化されるに際し、作者の言葉と資料が附録として加えられた。虚白は前言で、林琴南・胡適・魯迅・阿英等の『華海花』研究についての歴史を概述したあと、最後に、「培徳氏のこのたびの研究の結果は、私が父親のために伝記を書かなければならないという責任を免除してくれた。なぜなら、私自身が文章を書いたとしても培徳氏の成果を超えることができないと信ずるからです」とまで言っている。全面的な称賛と書いていいだろう。

該書はもともと李の博士論文として英文で書かれたもので、それ故陳孟堅訳となっているわけだが、李は執筆にあたって虚白にも面会し、資料的な援助も受けたらしい。緒言、第1章曾孟樸の青少年時、第2章科名与經典之学、第3章曾孟樸与法国文学、第4章作家、出版家和翻譯家、第5章「華海花」——一部社会抗議の小説、という構成になっている。虚白の「年譜」に見られぬ事実

2) 兒子虚白未定稿「曾孟樸先生年譜」『宇宙風』第2期 1935. 10. 1。

3) 徐一士「読『曾孟樸先生年譜』」『国聞週報』第12卷第40期。1935. 10. 14。烏居久晴「《華海花資料》紹介」(『大安』Vol. 9 No. 9. 1963. 9) には、同誌第42期にも続篇が掲載されるとあるが、第42期を見てもみあたらない。

4) 『伝記文学』連載時(1974. 6. 1~1975. 7. 1)の題名は「曾孟樸先生的文学旅程」。

もいくつか明らかにされており、私も参考にすべき点は参考にしてゆくつもりである。

『魯男子』—— ひとつの資料として

孟樸の生涯を述べる際の基本文献は虚白の「年譜」であるが、青年期となると『魯男子』をこれに加えなければならない。

未完の長篇小説『魯男子』は全6部が構想されていた。恋・婚・楽・議・宦・戦のうち恋の25章のみが完成しており、婚・戦のそれぞれ2章⁵⁾が書かれただけで未完のままとなっている。雑誌『真美善』に連載が開始された時、序幕がついていたが、単行本化の際に削除されている。

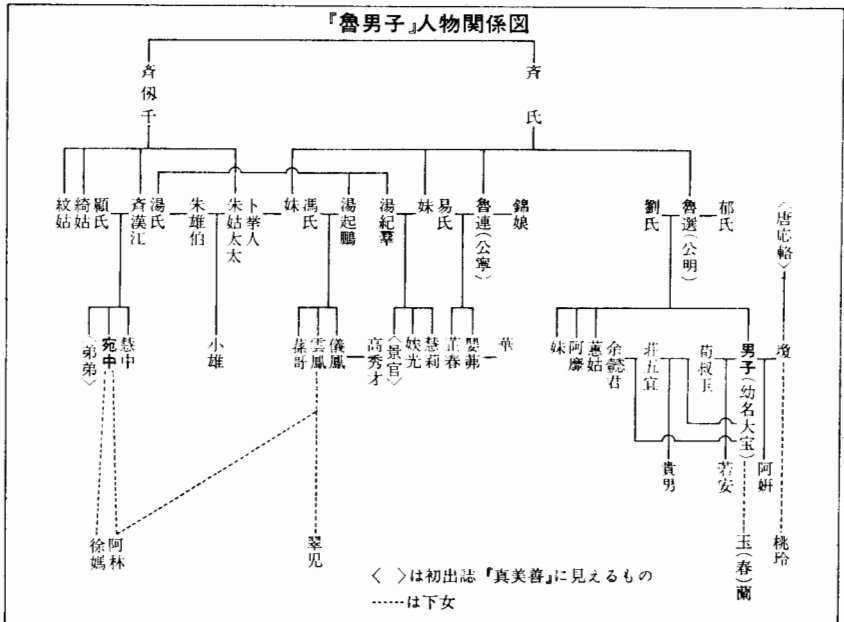
虚白の説明⁶⁾によると、『魯男子』はゾラの「ルーゴン・マッカール叢書」を範に取り、魯男子を主人公とした6部作が予定されていた。孟樸自身の一生の経歴を背景とし、清末から国民革命の成功までの社会の変遷を表現することを主題にしていたという。各部のおおよそは、「恋」では宗法社会における青年男女の恋愛生活の苦痛、「婚」では一步進めて宗法社会の家庭での妖怪ばけ物の百態、「楽」では上海で当時一世を風靡した妓楼を背景に、帝制を打ち倒し民国を創建するその過程、「議」では軍閥の横暴と議会における地方人士の奮闘、「戦」では軍閥の混戦と国民革命軍の勝利をそれぞれ描くことになっていた。ただ、「宦」についての虚白の説明が欠落しているが、順序から見ても孟樸の官吏時代を題材に取ったものであろう。

以上の雄大といってもいい構想は、確かに孟樸自身の経歴をからませながら当時の社会を描くことにあったであろうことは予想できる。しかし、これはあくまでも予定であった。先に述べたように、実際に完成したのは「恋」の部のみであり、全体が計画通りのものになったかどうかは今では知るすべもない。

さて、からくも完成された「恋」は、発表当時から自伝であるかないか話

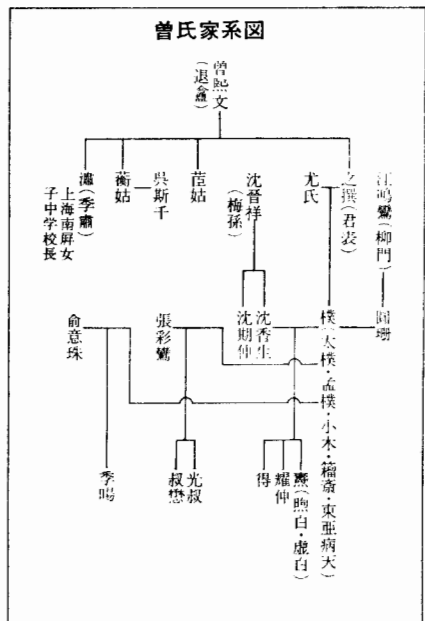
5) 『魯男子』の初出誌『真美善』第5巻第2号には第2部「婚」の「二観風」が掲載されているが、現在見られる単行本には未収録である。

6) 曾虚白「魯男子的写作動機与計画」『魯男子』上冊台湾世界書局1959. 8。この文中、虚白は5部作というが6部作の誤まり。



題になったらしい。1928年5月25日の孟樸の日記には次のようにある。

ある人が私にたずねた——『魯男子』の「恋」は事実ですか。——当然事実です。しかし、筋には変更と顛倒があり、時間がすべて本当のことと符合しているわけではありませんが、これは小説家の伝記体小説の常例です。ただ情感に重点を置きましたので、情感を描いたところはすべて本当のことです。ほとんど虚偽はありません。⁷⁾



小説であるからにはすべてを事実と見なすことが出来ないのは当然であろう。孟樸自身、「筋には変更と顛倒があり、時間がすべて本当のことと符合しているわけではありません」と述べている通りだ。たとえば、「恋」の中で、主役ではないが重要な役割を担っている阿林という女中のモデルを同じ日記の中で明らかにしている。

ある恋愛事件(後述)に破れ、傷心の北京で出会った15.6歳の女子と言葉を交わすようになったが、2度目に上京し訪問してみると肺病で死んでいた。名を林杏春という。阿林のイメージを彼女に求め創造したというわけだ。この一例をもってしても、小説「恋」と事実を同一視してはならないことがわかる。「恋」に記述されている事がすべて事実と一致しているわけではない。だが、しかし、それにもかかわらず、基本的な設定、つまり、魯男子を中心とした家庭、その環境、人物関係等は孟樸のものを基礎として作成されたと考える。

前頁に掲げたのは、『魯男子』の人間関係図と曾氏の家系図である。曾氏の家系については、「年譜」をもとにし筆者が作成したものを、虚白氏に訂正加筆してもらったもので、今まで明らかになっていなかった孟樸の祖父、あるいは父之撰の兄弟が名前だけでも判明した。このふたつの図を、孟樸(魯男子)を中心にしてみると、汪門珊(唐瓊)、沈香生(荀叔玉)、張彩鸞(莊五宜)、翁意珠(余懿君)と呼応し、父に弟1人と妹2人があるところまで同一なのである。

虚白の「年譜」にあまり触れられていない孟樸の幼少期と、56歳⁸⁾の孟樸に筆を取らせた青年期のある恋愛の敗北を、この『魯男子』によって述べてみたい。

幸福な家庭

孟樸の祖父熙文は『重修常昭合志稿五十卷』(光緒甲辰<1904>活版排印)によると、道光壬辰(1832)の挙人である。字は酉生、号は叔巖、予謙子。常熟の人。

7) 東亜病夫「病夫日記」『宇宙風』第2期(1935.10.1)。

8) 本稿での年齢はすべて数え年である。

性格はさっぱりとしており、内閣中書を賜わるが、家に隠退して自ら楽しみ、小園を作り、明瑟山荘と名づけ読書を日課とした。家屋を多く建て、肥沃な田千畝をさき義荘を造ろうとし、ほばかたちをととのえた時死亡、子之撰、宝章にこれを完成するよういつけた。詩文は豪邁にして奇気があり、著書に明瑟山荘詩、古文五巻があるという。

何が何でも官職につくというわけでもなく、むしろその方面の欲望はなほだ薄く、隠居をして小園をつくり気ままな読書と思索にふけるといふこの祖父の行状は、ほとんど曾家の伝統的行動様式であったように思われる。父之撰にしても、また孟樸自身も、科擧の上級試験に落第するや官職を買ってもらい、当時の名士との交際に日をすごすという、まことに裕富な生活を送ったし、またそういうことが出来るだけの経済的背景があった。

『魯男子』第1部「恋」の「二元宵」を見てみよう。

魯男子は代々学者の家柄の子であり、揚子江南岸、江潮にのぞむ山紫水明のイ……城に生まれた。彼の父親は科擧の試験に失敗した老名士であり、名を魯選という。ただ彼は人となりが正直で、土地の大小を問わぬ事件も彼が口をきけば、皆は彼の公明なことに敬服した。ゆえに町の者は彼を魯公明と尊称した。彼は30歳をすぎて擧人となり、文名は天下に響き、交遊は高官にあまねくゆきわたってはいしたが、7、8度会試に応じ、才を愛すること命を惜むと同じあれら大総裁は皆この有名な者を弟子にしたいと思っていたが、どうしても一場のはかない夢のように落第してしまう。母親の齊氏は大変せっかちで、彼のためにまず戸部郎中を買い、官吏録に名を登らせて家業の保障とせざるをえなかった。彼は志高く気質は硬骨で、金銭の鼻につく官など実際にやる気はなく、幸いなことに祖先伝来の千畝のやせ田によって生活は出来たのである。貯蓄した利息で落ついた花園をたて、魯園と名づけ終日母につかえ花をめで読書を日課とし、清らかな幸福を享受していた。会試の年になると、例のごとく上京し、試験におもむいたが、時には、1、2年都に滞在し次の試験を待った。これは決して彼の功名心が強かったからではなく、息子が状元宰相になるという齊氏の抱いている旧

思想をうやまっているにすぎず、試験場におもむきいいかげんにお茶をにごすよりしかたがなかったのだ。⁹⁾

「やせ田」と表現はしているが、千畝の広さの田をもち、官職につかずとも花園を造築でき、試験ともなると上京するのが常で時には、1, 2年都に滞在する。常熟から北京までの旅費、あるいは北京での滞在費も相当かかるだろうと考えられるが、それをまかなうに十分な経済状態というからには、もうこれは裕富な大地主というよりほかない。

父之撰、字は君表、光緒乙亥(1875)の挙人、刑部郎中、若い頃張謇、文廷式、王懿榮らと共に四大公車と称せられた。¹⁰⁾ 八股文の名手で、著書に登瀛社稿があるという。

同治11年壬申正月22日(西暦1872年3月1日)¹¹⁾、之撰の長子として孟樸は生まれた。母は尤氏。『魯男子』によると、最初の夫人郁氏は出産せず、まもなく死亡。次に娶った劉氏が初めの年に魯男子を生む。その時、祖母齊氏は孫を望む心が切であり、父公明も中年になって初めての子が男の子で、当然大層喜んだという説明がある。『魯男子』の通り、孟樸の母尤氏がはたして之撰の2番目の夫人かどうか今はわからないが、孟樸が曾家のはじめての子供、しかも男子ということで周囲の祝福のなかで誕生したことに間違いはない。このことは、「先生(註: 孟樸のこと。)は祖母のあつい愛、父母のいつくしみ、多くのおば姉妹にかこまれた大家庭において、幼児のころから成年にいたるまで、家庭の幸福を大いに享受した」という虚白の記述¹²⁾からもうかがえる。

親族のなかでも特に祖母にかわいがられた。『魯男子』の中で、祖母は魯男子をまるで夜光の明珠のようにあつかった、とある。風が吹けば凍るのではないか、日が照れば焼かれるのではないかと心配し、4歳になるとひとつベッドに身をよせて眠り、6歳になって先生をたのんで学堂に入れてもなおベッドを

9) 『魯男子』上冊台湾世界書局 1959. 8 15~16頁。

10) 劉文昭『《華海花》人物索隠表』『華海花』(増訂本)北京中華書局 1959. 11。

11) 『華海花』(増訂本)「前言」で張畢米は生年を1872年5月13日とするが、何によったのか不明。ここでは李培徳の言うところに従った。

12) 2) に同じ。

分けようとはせず、10歳になってやっと祖母のベッドのかたわらに別にベッドをおいて眠るようになったという。

この祖母こそ孟樸の文学に対する興味を最初につちかった人物なのである。

「読書」と「聴書」

代々学者の家柄の子である孟樸は勉強を始めることになる。6歳の頃である。以下は魯男子を曾孟樸に読みかえ、『魯男子』によって孟樸の学習状況にふれておく。

始めに『大学』『中庸』を読んだ時にはチンプンカンプンで、先生の教える調子のままに、読むのではなく歌うのであった。『論語』『孟子』に読みすすむとさらに嫌になり、『易経』『尚書』にかかわると読めば読むほどわからなく、嫌というよりもう恨みで、反抗心がめばえ、オウムのように口まねをしたくなかった。そのため先生にいく度ののしられ、いく度なぐられたかわからない。なぐるといっても戒尺や手を使うのではなく、手あたり次第に物を取ってめったやたらに頭をたたきわけで、ある時には力いっぱい耳を引っぱられて血まみれになったし、熱いキセルの雁首を頭におしつけられたこともあった。家の大人たちは、彼に対していろいろ甘やかしかわいがりはしたけれども、「読書」についてだけはかえって先生の残酷さを奨励した。父はいつも家にいるわけではなく、どちらかというといいかげんであったが、母の方は子を向上させたいという心がまさり、ますます締め付けを厳しくした。母の寝室がちょうど書斎の隣で、彼女はドアのところに終日たち、ドアのすき間から彼の挙動を見張り、壁をへだてた監督になった。書物を読む彼の声が低くなったり止まったりするとドアをトントンとたたき。彼はびっくりして声をはりあげ歌うというわけである。しかし、声をはりあげることもそう長くは続かない。ついに徐々にまた低くなるとすぐドアがたたかれる。断続するドアの音と、高くなったり低くなったりする声が一日にどれくらい繰り返されたかわからない。

当時の彼にとって唯一の苦痛は「読書」であり、また唯一の楽しみは「聴書」であった。勉強が終わって祖母と一緒に夕食をとったあとで、きまって祖母は

弾詞の何回か、あるいは小説の幾段かを歌うのだった。『岳伝』『征東伝』『天雨花』『安邦志』など聞くたびに、それら物語の主人公になったような気がした。そのうちだんだんと人が書を講じるのを聞くだけでは満足できなくなり、自分で読みたくなった。祖母の机から彼の読めるいくつかの、たとえば『来生福』等の劇本を持ち出し、暇を見つけて読むようになる。後には劇本から語りものにかわった。『封神榜』『列国志』『西游記』『鏡花縁』から『三国演義』へ。祖母の書棚ではあまりに陳腐・単調であると思うようになった彼は、コロンブスのような冒険をするつもりで勇気をふるい父親の蔵書を探索に出かけ、『紅樓夢』を発見する。その喜びは、新世界を発見することよりもうれしく、むさぼるように読んで、今まで男性だけの熱情に興奮していたのが、男女の熱情に衝撃をうけ、これより新しい人生を認識するようになった。

ある時、『野叟曝言』を持ち出したのを父親に見つかってしまった。父は性格温和で、子に対していつもニコニコとしているのだが、この時ばかりは彼を目の前に呼び、顔をまっかにし、机をたたいて大声でしかりつけた。彼がかくしていたものをすべて数えたと、祖母の書棚にカギをかけるようなのみ、自分の本もすっかりしまいこんでしまった。彼はこの打撃で10数日間苦悶したが、それがおさまると今度は方向を転換し、叔父の書棚をさがしに出かけ、漢魏叢書のなかの『飛燕外伝』『雑事秘辛』『搜神記』等を発見、王充『論衡』の「問孔」「刺孟」等の奇論もさがしあて、これより両性の熱情のほかには理智に対する熱情を強く感じるようになった。

以上が孟樸6～13.4歳頃の読書遍歴である。強制される正規の勉強にはどうしても身がはいらず、人目を避けて盗み読む読書の楽しみ。弾詞から中国旧小説という幅広い読書が、孟樸の文学的基礎を形成したと考えるのは不自然ではなかろう。李培徳は『紅樓夢』に感溺したことについて、「あの時代の児童たちがかげでこそそと長篇小説を読むのは、月並みで普通の事であった。しかし、彼の年齢で『紅樓夢』狂になるというのは少しばかり普通ではない」¹³⁾と指摘しているが、その精神的早熟性ととも、「生まれつき大変聡明ではあったが、ただ大変腕白で、記憶力はよかったが、多く取り込みすぎて十分こなしきれな

13) 李培徳著陳孟堅訳『曾孟樸の文学旅程』台湾伝記文学出版社 1977. 8. 1 14頁。

いという傾向がいくらかあり、のみこみはまだいい方だが、ただよく気移りがする」¹⁴⁾という性格をもあわせて見ておく必要があるだろう。

13, 4歳の頃、潘欲仁（子昭、江蘇常熟の人、附貢出身、沛県教諭）¹⁵⁾の指導のもとに本格的な試験勉強を始めるが、孟樸は相変わらず小説・筆記・雑集・当時性霊をそこなうものと目されていた書籍を盗み読みするばかりで、先生・年長者が叱責しても気かけなかった。熱心でなかったのは八股文の勉強だけであり、まさにその点が父親の心配の種であったが、孟樸の文才は意外なところで発見される。

虚白の「年譜」では、「ある日、君表公は先生の引き出しの中に、あの道徳家らしい容貌の厳格な人が机をたたき、うならざるを得ないような美しい駢文を発見して驚いてさげんだ、『大大（先生の幼名）は何と精通していることよ！』というくだりだが、『魯男子』ではもう少し具体的に、叔父の言葉として語られている。

——私たちのこの甥は、公寧は魯男子の手を取って言った、14歳の頃からえらいもんですわい。とてつもなく腕白だとばかり思うておったのじゃが、何と、ある日これの文机の引き出しの中から、私は書き物をひと山捜し出しましてな、司馬相如の「上林賦」にならって作る「魯園賦」とか、初唐四傑体にならって作る「上巳山塘修禊敍」とか、筆記・詞曲・考証等、何でもありまして、ようやくこれの天才を発見したわけでな。しかし、今でも強情を張ってどうしても八股を作るのに熱心にならんもんで、これの父親におこられとります。¹⁶⁾

このことがあって、孟樸は自分自身の才能を認識するようになり、町の張隱南¹⁷⁾、胡君修、蔣志範らと交遊し、文名は徐々に町に聞こえるようになった。

14) 9) に同じ。18頁。

15) 10) に同じ。

16) 9) に同じ。86頁。

17) 張鴻、字は隱南、号を燕谷老人、蛮巢居士という。江蘇常熟の人。光緒甲辰(1904)の進士。外務部庶務司郎中。民国成立後朝鮮仁川領事に任命された。総領事として

張隱南は、孟樸の生涯の友人として後に続孳海花を書いた人物である。1934年晩秋、常熟にもどって来た孟樸を彼の虚霽園（『魯男子』に見える魯園のこと）に訪ねた張隱南は、往事を回想して次のように述べている。

君表先生がこの園（註：虚霽園）を建築してから、私と東亜病夫はふたりとも白いあわせと黒い服で、さっそうとした若者で、この園に来ない日はなかったことを思い出さずにはいられない。当時、汪柳門、呉清卿といった諸名士がいつも蘇州から常熟へやって来て、詩や酒を楽しんだ、云々。¹⁸⁾

父親君表の名士との交遊の様子がわかる。孟樸は、後に汪柳門の娘を呉清卿の媒酌で娶ることになるが、その前に孟樸の恋について触れなければならない。

曾 孟 樸 の 恋

精神的に早熟な孟樸が、肉体愛と精神愛の矛盾に苦しんだのが、遠い親戚に当る「丁氏二表姐」¹⁹⁾との恋愛だった。

虚白の「年譜」には次のように書かれている。

同時に、この過程において（註：張隱南らと交遊し、文名が次第に広まったこと）先生の誠実な熱情は、すでにある恋愛の対象をさがしあてていた——彼が一生で最も心を傾け愛慕した恋人、彼が60歳すぎの晩年になっても、なおしっかりと胸にいだいていたいとき人である——不幸なことに宗法の社会は、彼のあの奔放な熱情の流露を許さず、その結果、彼は狂妄である、浮薄であると責められ、終世忘れることのできぬ恋愛上のきずの

長崎に在留したこともある。著作に「元史訳文」「蛮巢詩詞稿」など。田原天南『清末民初中国官紳人民録』（台湾文海出版社影印 1973. 2）および、鳥居久靖「孳海花版本札記」（『中国語学』133 1963. 8. 15）による。

18) 張鴻『続孳海花』「楔子」台湾世界書局 1964. 4。

19) 「病夫日記」では孟樸自身「T」としか表現していないが、魏紹昌編『孳海花資料』では「丁氏二表姐」と直接名ざしているらしい。成宜濟『孳海花研究』台湾嘉新水泥公司文化基金会 1969. 8 3頁。

痛みを受けた。²⁰⁾

虚白の言うところによると、孟樸の恋愛の失敗は、宗法社会が許さずという
ことで、外的要因によるもののような印象を受ける。しかし、はたしてそう
か。何が原因で恋愛が成就しなかったのか、やはりもう一度『魯男子』を見る
必要があろう。

『魯男子』第1部「恋」全25章の全篇を通して、孟樸は彼の恋愛の発端、そ
の経過と破局を描く。(一方で、朱小雄と湯雲鳳の恋愛が対比的に描かれている
が、ここでは男子たちにのみの絞って見てゆく。)孟樸の恋愛対象である
丁は、作品においては齊宛中として魯男子より1歳年下の女性として設定され
ている。

男子と宛中は遠い親戚の関係ではあるが、ともに祖母齊氏にかわいがられ、
小さい頃より兄妹と呼び交わして格別親密であった。周囲の大人たちは、よく
あることだが、「小さな夫妻」と彼らをからかうのが常で、それが知らずしら
ず彼らの頭に刻み込まれ、兄妹の親愛から恋人への恋愛に発展し、口には出さ
ないが生涯の伴侶となる希望をお互いの胸に秘めるようになった。男子16歳、
宛中15歳である。将来は夫婦というのは、なにもふたりだけの希望的観測ば
かりではなかった。叔父の公寧も宛中は甥の男子に嫁ぐであろうと考えていたし
(八竜船)、宛中の父母漢江、顧氏も男子を好いており、男子らふたりは自らの
手足のように分けることのできぬものであり、娶わせることをまことに願っ
ているということが、宛中のおば綺姑、紋姑と男子の母劉氏との会話の中で話さ
れている(二十一錯吻了人)。お互いの両親も認めていた間柄であった。とこ
ろが、ある日突然、齊漢江から今後家に来る必要はない、最もいいのは永遠に
来ないことだ、と言いわたされる。その時の漢江の顔は怒りを含み、軽蔑の態
度であった。男子がその理由をたずねると、「なぜだかお前は知らないのか、
問うこともないだろう」との返事である(二十二死別与生離)。男子はショッ
クで、飯もたべない、眠りもせず、家中ひっくりかえるほどの騒ぎで、齊家
に対しての紋姑のとりなしもうまく行かず、公明も万策尽きはててしまった。こ

20) 2)に同じ。

うして男子と宛中の仲は引き裂かれてしまったわけだが、最後に、1年あまり後、なぜ突然漢江が男子を拒絶したのか、その秘密が明らかにされる。

その秘密とは、宛中に仕えていた女中の阿林をわがものとしようとした汪鷺汀という男が、もし宛中が男子に嫁いでしまうと阿林も一緒に男子のものとなるのを恐れ、陰謀をもってふたりの婚事を破壊したという。その陰謀とは、ふたりの仲がかねてから非常によく、三日にあげず男子は宛中に会いに行き、朝、宛中の起きるのが遅い時にはそのままベッドの几帳のなかに入りこみ、夫婦のように頭を並べて話をするといった具合なのを、汪はどこから聞きつけたのか、漢江の目の前で問題を起こさせるため、宛中のベッドに汪の第二夫人を寝かせておいたところに男子が忍び込み接吻をしたというわけだ。

汪の罠にかかってふたりは別れざるをえなかったということになるのだが、『魯男子』のなかでは、この個所が一番作り事めいているのを否定しがたい。前述したように阿林という人物自体が孟樸の創造であり、架空の人物をめぐる出来事をふたりの別離の原因にすることは明らかに無理がある。

ふたりの恋愛の破綻は、李培徳が言うような²¹⁾、親戚との婚姻という忌諱にふれたからではなく、孟樸自身の平素の行動、特に女性に関する素行に原因があったように思われる。

その点については、孟樸自身に語ってもらう方が理解しやすいだろう。

私は幼年時、感情は極めて豊富で、性欲もまた極めて強烈であった。私とTとの恋愛は、彼女を尊重したがために始終純潔を守ったまま、彼女の処女を犯すようなことはなかった。これは本当のことで、ただ私の受けた苦しみは大きかった。覚えているが、毎朝晩のあいびきの後は、よりそいからみあうといういちやつきを経たために精神状態がぼんやりしないことはなかった。考えてもごらん、あの頃のようにちょうど性欲が盛んな時、そのような刺激を受けて全身は火のように燃え上り、いかに我慢できようか。まず西廂記の指で消耗する方法にならない発散させるよりほかなかったが、心の中ではどうしても満足しなかった。徐々に、本当に試してみるこ

21) 13) に同じ。17頁。

とを考えはじめた。最初は年若い下女で、容貌は決してよくはなかった。ふとつまるい顔の、両頬はいつも深紅で、まるでふたつの桃のようであった。年はおおよそ19歳。——私はその頃16歳にすぎなかった。ちょっと、1, 2回誘惑し、ついに彼女を狂わんばかりにさせてしまい、色事の勇氣は天ほども大きいというが、とうとう朝私のベッドにやって来た。これが最初の性の試験である。数日せぬうちに、母親にさとられてしまい、彼女は追い払われた。次は近所の女性で、容姿は比較的よく彼女の方から私を誘惑したもので、私も来る者は拒まない。このような行為はよくないと、当時自分でもよくわかっており、終わったあと後悔しないことはなかったが、抑制できぬほどになってしまうと知らずしらずまた犯してしまうのだった。この事をTに知られてしまったため、何度ひそかに言い争ったかわからず、いつも私は身体中傷だらけだった。しかし、彼女はかえって私を理解し、同情することができ、でたらめをするのをわかってくれ、決して真情を動かすようなことはしなかった。だが、そういう習慣が育成されてしまった。私の一生の勝手気ままな行為は、ここに始まっていないともいえない。²²⁾

以上の文章は孟樸の日記（1928年5月25日）の一節である。赤裸々な告白も日記に書いてしまってから心理的抑圧が薄れてしまったのか、同年8月16日に発行された『真美善』第2巻第4号の『魯男子』「十二墜落」²³⁾にそのまま取り込まれ、新しく来た阿大姐が男子のベッドから朝早く出てくるのを人に見つけられ、母親をひどく怒らせ、女は追い出し、男子をなぐったこと、また男子より2歳年上の、夫をもつ近所の女を誘惑したこととして描かれている。

以上のことを見てくると、孟樸は精神的に早熟であったばかりでなく、肉体的にもかなり早熟であったと考えられ、まさにこの肉体と精神のバランスの問題が当時の孟樸の最大の関心事であったし、また小説『魯男子』の主題であった。

22) 7) に同じ。

23) 『真美善』発表時には墜落であるが、単行本には墮落と改めてある。

前述虚白の「年譜」の、「不幸なことに宗法の社会は、彼のあの奔放な熱情の流露を許さず、その結果彼は狂妄である、軽薄であると責められ……」という個所をもう一度考えてみると、「奔放な熱情の流露」とは、父孟樸の性的素行のことをやわらかくそれとなく暗示して書かれていることが理解できよう。『魯男子』「二十五最後一信」では、漢江の言葉として男子のことを「放蕩息子」とののしり、「花のようなかわいい娘を羹壺に捨てることは断じてようしない」とまで言われたように孟樸自身が表現しているが、ある程度、当時の孟樸に対する周囲の見方のひとつをうかがわせてくれる。

16歳から17歳にかけての恋愛の熱狂が孟樸の敗北に終わった時、その原因がほかでもなく自分自身にあると判明したことが、孟樸に自虐的な行動を取らせることになる。

私はこれより（註：丁との関係が絶望的になったこと）歩む道がなくなった。放蕩という方法で煩悶を自ら解き放つよりしかたがなかった。おおよそ私の肉欲をほしいままに出来る場所では……私はやらないことはひとつもなかった……もし父親が私を北京にやらなかったとしたら、どんなことまでしてかしたかわからない。²⁴⁾

虚白が孟樸の日記から引用した文章である。「後に私とTとの婚姻問題がもう絶望的になると、私は長く病み、精神は極めて意気消沈してしまった²⁵⁾」という孟樸の日記とあわせ見てみると、Tとの恋愛の失敗がいかに孟樸の精神に傷を与えたかよくわかる。それと同時に、彼の性格、つまり、こうと決めた事柄には徹底的に熱中し、そのあまり病気になるかねない、また実際に病気になってしまうという傾向を見て取ることが出来る。この性格は孟樸の生涯を通じて発揮されることになる。

（たるとも てるお）

24) 2) に同じ。

25) 7) に同じ。